

をとりあげ、「五月の節句が近づく」と自然に口からもれるこの歌。幼い日の思い出をさそうこの童謡を子守唄のようにして育った人は多いだろう。親しまれた童謡なのにその作者についてはあまり広くは知られていない」として、4分の1面をつかって歌が作られた背景から童謡碑建立までを見取図や写真を入れて構成した。

▼昭和46年（1971）

12月19日付朝日新聞「広場」（カラー）は、「おもちゃのマーチ」の歌詞と譜面をあしらい構成した紙面である。

▼昭和49年（1974）

5月5日子どもの日・NHK静岡放送局から全国ネットで、「せいくらべ・海野厚」という30分番組が放送される（9・30と再放送18・00、プロデューサーは同局五十嵐修アナウンサー）形式はインタビュと歌唱、ハーモニカ演奏及びナレーションによる録音構成で、インタビュは前記小田重太郎、福地省吾の他、「おもちゃのマーチ」他を作曲、曲水同人としても生涯の友であった故小田島樹人の妹東郷京子、歌手森山加代子、作曲家浜口庫之助、映画監督山田洋次と多彩な顔ぶれであった。

その中で山田洋次は次のように語る。

「満州で過ごした少年の頃、学校で習ったと思う。この歌を通じて内地のことを色々想像したのを覚えている。この歌はあんまりすばらしい歌なんで、作者のことは考えもしなかったし今はじめて名前を知った。これはすばらしいことで、俗人はいい作品を作るより名前を出すことにかけてがる。日本人で知ら

ぬ人はない歌だと思うが、作者の名は出なかった——それが芸術の一番正しいあり方であって、厚という詩人はそういう美しい魂をもった人に違いないと思う」

7日付毎日新聞県版が、故人の50回忌法要が命日の20日に法蔵寺で行われることを報じた。

20日・50回忌法要、導師遠山弘文。

幼な友達、中学の同窓生、児玉光弘他母校の小学校関係者、静岡市の文化面を負う加藤忠雄、中川雄太郎、小川龍彦、白沢良らの他、曲水時代の盟友青木よしをが東京から、同じく同郷の加藤余石、親族親戚ら約60人が参会。曲水社主宰渡辺桂子の「追悼のことば」が青木理事長より代読され、又渡辺桂子からは別に電報をもって献句があり、よしを、余石からも焼香の際それぞれの献句が披露された。（本編付録所収）

法要には親族親戚一同による「背くらべ」の斉唱も生まれ、衆僧読経のうち焼香一巡後、墓に献花、50年を回想しつつ法要を終る。

当日は別室に、故人の生前の写真、肖像画をはじめ遺愛の短冊入れなどゆかりの品々を展示、参詣の人達にも公開し、又中川雄太郎がこの日のために制作した「背くらべ」の版画色紙が参会者に贈呈された。（巻頭写真参照）

なお、法要その他をテレビ静岡がフィルム取材し、6時のニュースに流した。

21日・テレビ静岡では朝のワイド番組に、50回忌に囚む15分ワクの企画を組み、スタジオで故人の肖像画を映しながら前日の法要のフィルムをナレーションと共に見せたのち、加藤余石、弟欣也、春樹3人が明治大正の時代に生きた故人の思い出を語